テーマ展
解説シート

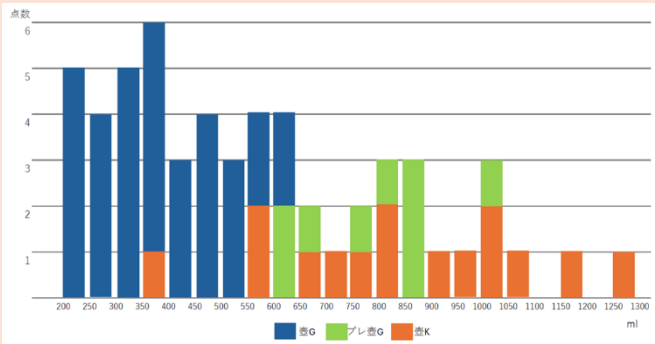
プレ壺Ｇってなんだ？

解説シート②「堅魚煎汁ってなんだ？」でも出てきた「堅魚」荷札木簡ですが、天平年間（729～749 年）に集中することが分かっています。と、ここで一つの疑問が浮かびます。壺Ｇは８世紀後半～９世紀中頃にかけて生産されたと考えられていますが、そうすると「堅魚」荷札木簡と時期が合わないことになります。カツオを頻繁に運んだであろう天平年間には、壺Ｇはまだ存在しないからです。これは、Ａ説：堅魚煎汁運搬説にはかなり不利な状況といえます。

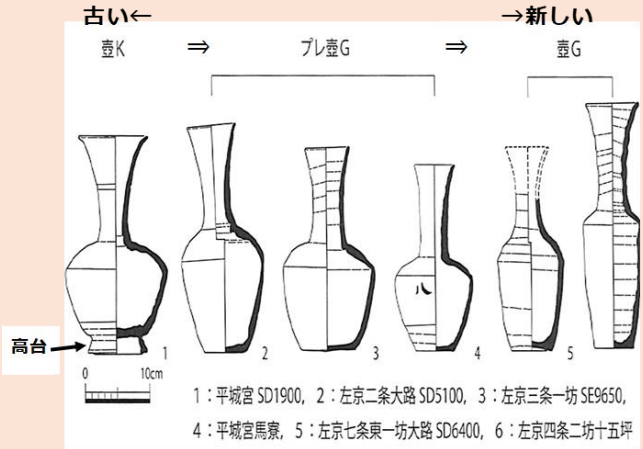
ところで、平城京からは通称「プレ壺Ｇ」と呼ばれる特徴的な壺が一定量出土していることが知られています。その多くは、奈良時代中頃（８世紀前葉頃）に帰属するため、明らかに壺Ｇよりも古いものです。壺Ｇフレンズの小田裕樹によると、その特徴は以下の５点にまとめられるようです。

① 体部は肩が張り、稜角をもつものが多い
② 風船技法※を用いた三段構成
③ 高台はつかない
④ 底径が広く、底部切り離しは糸切りとヘラ切りの両方ある
⑤ 容量は 600ml 以上

さらに小田は、これらの特徴が、壺Ｋ（長頸壺）と壺Ｇ両者と共通するものが多いことから、プレ壺Ｇが、壺Ｋと壺Ｇの中間的な形式と位置づけました（小田 2024）。このプレ壺Ｇの位置づけについては、容量の観点からも的を射ているといえそうです。第１図は、壺Ｇ、プレ壺Ｇ、壺Ｋの容量分布を示したものですが、壺Ｋ→プレ壺Ｇ→壺Ｇの順で徐々に容量が減少していく傾向が認められるようです。このことから、壺Ｋからプレ壺Ｇ、そして壺Ｇという貯蔵具の変遷過程が想定され、徐々に小容量の内容物の貯蔵・運搬に特化する中で壺Ｇが成立したと理解されます（第２図）。



ここで、冒頭の問題、木簡と壺Ｇの年代の不一致に立ち戻りますが、「堅魚」荷札木簡の時期（天平年間）には、すでにプレ壺Ｇは存在していますので、堅魚煎汁は、壺Ｋやプレ壺Ｇを使ったのではというのが、堅魚煎汁運搬説を推す研究者の見解です。今後の研究によってこの謎が明らかになることが期待されます。



第２図　壺Ｇの成立過程　（小田 2024）

（田中祐樹）

※甕の内側に当て具（丸い板状の道具）を当て、外側から叩き板（羽子板状の板）で叩いて空気を抜き、土を締め固めて厚みを均一にし、形を整える技法

【参考文献】
小田裕樹 2024「６　須恵器壺Ｇとはどのような容器か？」『カツオの古代学』吉川弘文館